

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520745

研究課題名(和文)1891年濃尾震災の被害・救済・復興過程の歴史学的研究

研究課題名(英文)Historical studies of damage, relief and reconstruction process of the 1891 Nobi earthquake

研究代表者

羽賀 祥二 (HAGA, Shoji)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：30127120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は歴史学的立場から1891年の濃尾震災の被害・救済・復興の過程を、未発掘の資料を網羅的に収集しつつ、解明することを目的とした。特に愛知・岐阜両県の史料保存機関やこれまで編纂された自治体史、さらに現在編纂中の愛知県史や豊田市史の資料調査の成果などを通じて、新出史料も相当程度発掘でき、その検討の成果を公表した。本研究でもっとも力を入れたのは、岐阜市に所在する濃尾震災記念堂の所蔵資料の調査と、記念堂の建立・維持に関する検討であった。その成果については、紀要論文として公表し、また記念堂関係者と協力して記念堂の歴史と現状に関する冊子を刊行した。記念堂の建立・維持について、下記の英文で発信したい。

研究成果の概要(英文)：What has the modern Japanese society created systems for commemorating victims of natural disasters? It has constructed pagodas based on traditional folk belief or Buddhism, documented disasters and constructed memorial monuments to preserve memories of disasters for future. The Nobi Earthquake left more than seven thousands casualties in October 1891. After the tragedy, a memorial facility, Sinsai Kinendo, was constructed for commemoration of victims. Local people have kept on mourning at this site up to now. This paper examines newly found materials on the memorial facility and articulates findings.

研究分野：日本近代史

キーワード：濃尾震災 震災記念堂 震災記念碑 災害復興 慰霊・追悼 近代日本災害史

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、これまで申請者がおこなってきた木曾三川流域を対象とした治水・治山をめぐる地域環境史的研究、及び濃尾震災・災害記念碑研究を発展させるために取り組んだものである。これまで得た知見と成果をふまえ、濃尾震災における救済と復興の様相を歴史学的立場から明らかにすることを目的とした。

(2) 特に申請者はこれまで、この地域の水害・地震の犠牲者の供養・慰霊に関して、法会の執行、記念碑・供養塔の発掘を通して考察し、治水事業に関する歴史的功労者の顕彰運動についても調査を続け、その成果を論文・研究報告を通じて発信してきた。また現在、濃尾震災の救済と復興活動については、町村所蔵史料や仏教団体の機関誌『明教新誌』を調査・分析し、また『岐阜日日新聞』、『新愛知』などの新聞や日本赤十字社・愛知県病院などの史料も参考にしながら、復興をめぐる問題、義捐金・医療などの救済活動の実態についての論考を公表してきた。

(3) 濃尾震災研究は飯田汲事による先駆的な被害調査や啓蒙的な著作や、写真集の復刻や被害報告書などの復刊によって基礎が作られてきた。そして二〇〇〇年代に入って、村松郁栄・松田時彦・岡田篤正が『濃尾地震と根尾谷断層』で地震学の分野における総括的な研究をまとめたが、主として地震学研究に偏重した研究傾向にある。歴史学的研究は限られた分野でわずかに存在するに過ぎず、主に岐阜・愛知両県の自治体史の記述が濃尾震災の研究成果である。

(4) 他方、個別研究としては、主として罹災者救済問題と災害復旧の政治過程を対象にした成果がある。罹災者救済については、菊池義昭・中西良雄による孤児救済の活動の研究、愛岐震災自助会などキリスト教団体による救済活動の研究、他方政治史

的研究においては、災害を政治史研究に組みこむことをめざして、災害土木費国庫補助問題を取りあげた飯塚一幸の研究や岐阜県議会の対動向に焦点を当てた重松正史の研究がある程度である。

(4) 災害史研究は、とくに北原糸子によって著しく進展してきた。『地震の社会史』、『磐梯山噴火』、『近世災害情報論』など歴史災害に関する意欲的な研究が出されてきた。こうした北原の災害情報論という斬新な問題提起をふくめ、その意欲的な研究成果を引き継ぐことによって、災害史研究の厚みを増していくことが必要である。また、北原も主要なメンバーである中央防災会議の歴史災害の教訓に関する専門委員会によって、地震・噴火などに関する調査が実施され、報告書が継続的に刊行されている。濃尾震災に関しては、『一八九一濃尾震災報告書』(2006年)が公表された。この報告書では、濃尾地震の地震学上の特徴、建築物や土砂災害の概況、岐阜・愛知両県の被害と救済の状況、災害救援の様相、濃尾地震の教訓といった地震学・地質学・建築学・歴史学など各分野の研究者を結集した内容からなり、はじめての濃尾地震に関する総合的な研究であるといえる。災害を取り巻く諸問題についての最新の成果がそこに見られるが、申請者もこの調査に参加し、濃尾震災と東南海地震における愛知県の被害と救済、社会的対応に関する論考を提供した。

(6) こうした災害史研究の活発化は、間近に迫ると予測された東海地震・東南海地震を前にして、地震発生メカニズムの究明、被害の様相の解明などを通じて、地震災害への社会の関心を深め、災害から得た教訓を市民に伝え、防災・減災意識を高めることに主眼が置かれてきた。しかし、2011年3月の東北大震災の発生は、よりいっそう切実に地震災害・津波災害への対応、地域社会における防災力・環境保全力の向上を課題

とするに至っている。東海地域でも東海・東南海・南海の三連動地震への危機意識が深まり、市民の防災への取り組みも切実感を増すようになった。濃尾震災からちょうど120年を迎えた現在、この震災が地域社会に与えた被害の実態、救済と復興のプロセスにおける問題点、犠牲者慰霊のあり方などを明らかにすることは喫緊の課題であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は1891年10月28日岐阜・愛知両県に甚大な被害を出した濃尾震災の被害実態、震災直後の救済活動、県・郡・町村による復興事業、宗教的慰霊、記念施設（供養塔・記念碑・記念堂）などについて、新たな史料を発掘しつつ調査・研究することを目的とする。19世紀後期に度重なる災害で甚大な被害を受けてきた地域社会が、この震災による社会的・自然的環境の変化へいかに対応したのか、そこにどのような防災力・環境保全力が形成されていったのかを検討する。この研究は確実に近いうちに想定される東海・東南海連動地震へ向けて地震とその後の社会的対応全体についての教訓を歴史学研究の立場から貢献することにある。

3. 研究の方法

(1) 本研究では濃尾震災の町村レベルにおける被害状況を明らかにするために、これまでの自治体史編さんのなかで調査、発掘された濃尾震災関係史料の網羅的な収集と、未発掘の史料の丹念な収集をおこなう。それによって被害の実態と罹災者への救済活動の内容、復興の具体的進展、町村レベルでの様相を明らかにする。また、県と町村を媒介し、震災対応のあつた郡の機能を明らかにするために、愛知・岐阜両県の郡役所文書、郡長経験者の私家文書の調査を実施する。また、犠牲者への宗教的慰霊に

ついてはこれまでの供養塔・記念碑研究を踏まえて、岐阜市の震災記念堂史料を調査し、慰霊のあり方、災害に対する社会意識の特質を解明する。

(3) これまでの自治体史編さんのなかで収集、発掘された濃尾震災関係史料の網羅的な収集に努める。それによって被害の実態と罹災者への救済活動の内容、復興の具体的進展、宗教的慰霊活動などについて、町村レベルでの様相を明らかにする。最近刊行された『瀬戸市史』や『新川町史』など愛知県内の自治体史では、区有文書の悉皆調査のなかで新しい史料も詳細されており、こうした最新の成果を検討する。

(4) 特に甚大な被害を出した岐阜市、大垣市、一宮市などの図書館・歴史資料館には、活用されるに至っていない多くの史料が眠っていることが目録等によって確認される。岐阜県歴史資料館の町村文書・区有文書・私家文書、大垣市立図書館の町村文書、一宮市豊島図書館の所蔵史料などを調査し、震災関係文書を抽出する。

(5) 岐阜市の震災記念堂は濃尾震災の年忌法要や月命日の法要が継続的に営まれてきた宗教施設である。この記念堂は天野若円（浄土真宗僧侶・岐阜県選出代議士）らによって創建されたもので、東京都慰霊堂と並んで震災慰霊施設としてきわめて重要な施設である。この『震災記念堂関係文書』は天野家の子孫が岐阜市歴史博物館に寄託しており、岐阜県内の震災犠牲者の名簿（『震災死亡人台帳』）、記念堂建立と維持・運営に関する史料（『記念堂維持法』、『濃尾震災五十年忌懇志帳』など）、その他震災写真、設立母体の愛国協会の関係史料などをふくむきわめて興味深い史料群である。この史料の収集・撮影・分析によって震災犠牲者への宗教的慰霊活動の実態、震災後現在まで継続されている慰霊の様相を解明する。

4. 研究成果

(1) 濃尾震災に関する自治体史に掲載されている史料の収集については、一通り終了させることができた。これに基づいて震災の様相を明らかにする作業を進めている。

(2) 豊田市や岐阜市における未発掘の震災史料を収集することができた。前者については、今年度刊行の『新修豊田市史』にその一部史料を掲載することになった。後者については、岐阜大学地域資料センターや岐阜県図書館で史料調査を実施し、地震の被害が甚大であった山県郡高富村の『丹羽家文書』の中に私的日記・復興関係史料などを発見し、収集することができた

(3) また、愛知県については、継続的に愛知県公文書館などで史料調査を実施した。自治体史の調査などを含め、調査の成果については、現在編集中の『愛知県史』通史編に原稿を提出し、来年度の発刊の予定である。

(4) 本研究の主要な目的であった岐阜市の震災記念堂については、主要な史料の撮影を終え、その分析を進めた。とくに震災記念堂の建立とその維持に関しては、かなりの程度解明することができ、その内容は大学の紀要に発表した。

(5) また、震災記念堂は現在も定期的に供養活動を行っているが、記念堂関係者とともに『震災記念堂』という冊子を刊行した。これには現在、記念堂維持に尽力している関係者の随想と座談会、震災記念堂のこれまで活動、記念堂資料に関する論考などを載せ、はじめてこの震災記念堂の歴史と現状について社会に明らかにすることができた。刊行に当たっては記者発表をおこない4社の新聞・テレビの取材を受け、新聞記事などの形で公開された。

(6) また申請者はこれまで震災地域の記念碑・供養塔の調査を進めてきたが、そのまとめとして紀要論文や冊子の中で、あた

らたに発見したものも含めて、記念碑・供養塔の建立・維持などについてのまとめを行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

羽賀祥二、濃尾震災記念堂の建立と維持、名古屋大学文学部研究論集、史学 61、2015年3月、1-24
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/21573>

〔学会発表〕(計1件)

濃尾震災と震災記念堂、歴史地震懇話会、2013年7月

〔図書〕(計1件)

羽賀祥二・濃尾震災記念堂保存機構、濃尾震災記念堂 - 歴史を繋ぐひとびと -、科研費による出版、2015年、161

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

羽賀 祥二 (HAGA, Shoji)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30127120

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：